



会員寄稿

「人の世に熱あれ、人間に光りあれ」

人権・同和教育推進主任 繁樹 義一



これは、全国水平社創立の地の記念碑です。1922（大正11）年3月3日の創立大会、その京都の岡崎公会堂の跡にあります。

私は「全国水平社創立宣言」の「人間は元来、勤（いたわ）る可（べ）きものじゃなくて尊敬すべ可（べ）きものだ」というところが好きです。

人間を同情的なあわれみや、いたわりで人間を見るのはまちがいです。やさしさや思いやりではなく、人権の本質である自由と尊厳を守ることによって、尊敬し合える社会が実現すると思っています。

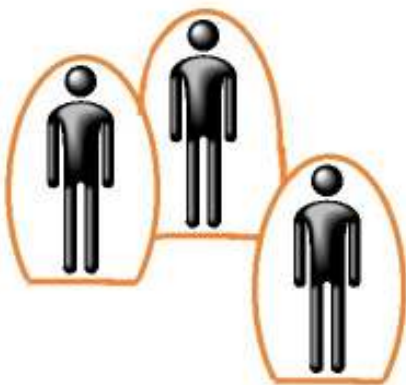


この碑文には「・・・人の世に熱あれ、人間に光りあれと結ばれたこの創立宣言は、日本の近代民主化に黎明をもたらす最初の人間宣言の榮譽を担うものとなった。それはこの宣言が単に部落解放のみならず、すべての人間の解放を目指す普遍的な原理に根ざしているからである・・・」と刻まれています。

この人の世の熱と光は、いろいろな解釈があり、住井すゑさんは、「熱は、人の心にある生きる力であり、光はそれを集めた社会である。この2語は対句であり人間と社会の関係性である」と述べられています。また、ある人は「熱

は、思いやり、光は認められること」と言われます。

起草された西光万吉さんは「人に個別に光が当たるんじゃないで、人と人との間の万物すべてに光があたること、人と人との平等になるという意味だ」と述べられています。たしかに個別に光が当たると、この図のように影ができます。



しかし、一人一人が発光体になって、生きる輝きを放ち始めると影はできません。そしてその光は互いに混じり合いさらに明るくなります。実は「人間の世の熱」と「人間の光」は、このようなかたちで個人として尊重し合う社会、尊敬し合う社会なのかもしれません。

自分自身の差別意識や利己心から解放されて、本当の意味で、自分の心と体の主人公になることなのですね。

つまり自分らしく生きることなのです。

これが、碑文の人間宣言ということばであり、人間解放の意味だと、最近になってやっと気づきました。